

「学部の強い意志を伝える」「遊撃隊を配置」「カメラ200台」

学部当局「97・6・28暴力的工事」の恐るべき計画性が明らかに！

「6・28暴力事件損害賠償請求訴訟」の審理過程で初めて明らかにされた「計画文書」の驚くべき内容！
—————教養学部当局による学生無視・暴力的な「廃寮」強行の姿勢が改めて浮き彫りに

昨年の6月28日に学部当局によって引き起こされた「97・6・28工事」(右の囲み参照)の「計画文書」が、「6・28暴力事件損害賠償請求訴訟」の審理過程で初めて明らかにされました。そして、この「計画文書」は、実に驚きを禁じ得ないような内容となっています。

「計画文書」が物語る当局の学生無視の姿勢

これまで学部当局は、駒場寮問題について口先では「話し合いによる解決を」と言いながら、実際には「一方的な決定を押しつけるための話し合い」しか行ってきませんでした。学部当局が実際には学生の意思を尊重するつもりなどないことを、この「計画文書」は如実に物語っています。

「計画文書」のなかでは、「6月27日午後7時より特別委員会は学生と話し合いを行う。今回も工事を開始する旨、学生側に伝える」「28日午前7時30分よりフェンス工事を開始する」と書かれていますが、これは、「自分たちの決定を、『話し合い』と称して一方的に『伝え』れば事足りる」と考えていることにはかならず、学部当局は最初から学生側の意見を聞くつもりなどさらさらしないことの表れです。

また、同文書では「説得の意義」として、「学生の関心を妨害行動からそらす」「学生の興奮を静める」などとしています。しかし、本来「説得」とは、「話し合って納得してもらうこと」を意味するのであって、「関心をそらす」ことなどでは決してないはずで

こからも、学部当局は、私たち学生と話し合っ問題解決しようとするのではなく、「学生の関心をそらし」て自分たちの決めた「計画」を強行するという学生無視の姿勢であることがわかります。

綿密な計画のもとに行われた暴力的工事

昨年6月28日の工事強行の裏に、このような「計画文書」が存在していたという事実は、学部当局がそれだけ周到な準備の下にこの暴力的工事を行ったことを意味しています。

大学当局は、この工事に際して、莫大な費用を費やして数百人のガードマンを雇いましたが、なぜこれほど多くのガードマンを雇う必要があったのでしょうか。それは、力づくでも工事を行うためとしか考えられません。実際、この日に抗議した多数の学生などがガードマンから暴行を受けました(右の囲み参照)。「遊撃隊」などから編成される「警備配置体制」(裏面参照)を見ても明らかのように、学部当局はガードマンの暴力を頼りにしてこの工事を強行したのです。

学部当局は学生無視の強硬姿勢を改めよ！

学部当局は、「6・28暴力事件」の全ての被害者に対して、誠実に謝罪と補償を行うべきです。そして、この事件に象徴されるような学生無視の「廃寮」強硬方針を撤回し、学生の意思を尊重した大学運営を行うよう、学部当局に対して強く求めます。

「97・6・28暴力事件」とは？

「97・6・28暴力事件」とは、1997年6月28日、教養学部当局が新帝国警備保障のガードマンを使って、学生らに対して暴行をはたらき、傷害を負わせた事件です。

この日、学部当局は、事前に寮生・学生との合意のないまま、駒場寮(北寮)東側の渡り廊下・庇・寮風呂の解体工事を、数百名のガードマンを引き連れて強行しました。これに対して、駒場寮生・学生などが、工事の強行に対して抗議行動を行っていたところ、学部当局はガードマンなどを使い、抗議する学生たちを渡り廊下の屋根にのせたまま解体を強行し落下させたり、学生を屋根の上から放り投げたり、集団でリンチを加えるなど暴力の限りをつくし、多くの学生などが負傷、うち4名が救急車で病院に運ばれる事態となりました。

その後も学部当局は、暴力事件の被害者らに対して、自らの責任を省みるところか、一片の謝罪すら行わないため、暴行を受けた者らのうち4名により、教養学部教官永野三郎、小林寛道、生井沢寛、及び新帝国警備保障(東大当局が雇ったガードマン会社)を相手取り、損害賠償請求訴訟が現在争われています。

教養学部当局は、「6・28暴力事件」に象徴されるような、学生の意思を無視した力づくでの「廃寮」強行方針を即時撤回するべきです

裏面に「6・28暴力事件」に関する学部当局側の「計画文書」(一部)を掲載！

駒場寮委員会

駒場寮の公式ホームページもよろしく！
<http://www.netlaputa.ne.jp/~komaryo/>